2026 ズバリ！的中 現代文

岡山大学

文章の冒頭は少しずれているものの、本文の主要な箇所はほぼ一致。物語の展開や登場人物の心情・人物像などについて問う設問も共通部分あり。

入試問題

前期日程
問二

問題　二

次の文章は、南木佳士「冬物語」の一部である。医者である語り手は、冬になるとワカサギ釣りに熱中していた。ある時、釣りの最中に誤って薄氷を割ってしまっておぼれかけたところを、近くで釣りをしていた園田かよさんに助けられ、かよさんの家で服を乾かすことになる。これを読んで、後の問に答えよ。（出題の都合上、本文に手を加えたところがある。）

ヤカンの湯が湧くまでに、かよさんは百所に立って大根と蕪掘りのみそ汁を作り、ネギのたっぷり入った納豆をかき混ぜて朝食を出してくれた。すみません、と礼を言ったら、ネギの香りが鼻をつき、ふいに涙が出そうになった。うららかな日曜の朝、いい歳をして初対面の他人の家で朝食をごちそうになっている。そのあっかましさと、ここまでに受ける毎日の行動のうわっつ加減に思いをめぐらすと、今ここにある自分がたまらなく情けなくなってしまったのだった。丁寧を尽き出して涙をこらえ、とりあえずめしをもらい、熱いみそ汁を飲んだ。薪ストーブのおだやかな輻射熱では暖まりにくかった冷えきった体の芯がほどけ、こわばった心身が楽になってきた。

「ちょうどいい、父ちゃんにめしもやってくるから」

かよさんはそう言って朝食を載せた盆を手にし、奥の部屋に入って行った。

かよさんはもう正式な自己紹介を受けた覚えはない。この朝、彼女の家に入るとき見た園田安男・かよという消えかけた表札でその名を知ったのである。

園田安男さんは台所のとなりの、もう一つ奥の部屋で寝ていた。脳出血の後遺症で右半身がきかなくなり、三年前から寝たきりになっているのだった。

自髪の坊主頭に茶色のしみの浮く安男さんは絶えず笑っていた。頬の筋肉に締まりがなくなってしまった結果としての表情に過ぎないのかも知れないが、それは見る者を深いところで安心させてくれる無防備な笑顔だった。

安男さんに食事を与え終えて台所にもどってきたかよさんに、

「どなたか病人でもおられるんですか」

と、問うてみた。

「ああ、父ちゃんがな、寝たきりだだよ」

かよさんはあっさりと答えてくれた。

これだけの恩を受けて、どうやって返せばいいのか見当もつかないところだったので、いくらか迷った末に、町の総合病院に勤める内科の医者だが、なにか役に立てれば、と申し出てみた。

「ありがてえけんど、五年前に倒れて、病院じゃあ、はあこれ以上回復しねえからって家に帰されてよれっきりだから、なんともならねえと思うだよ」

そうロにしながらも、かよさんは腰を曲げて奥の部屋に案内してくれたのだった。

安男さんの右の上下肢はすべての関節が硬直していて、たしかに回復の余地はなさそうだった。発語も困難な様子だが、意識だけははっきりしていて、いい笑顔をたたえていた。

「おらのワカサギ釣りは道楽じゃねえで、商売ですに。この父ちゃんの代わりにこらの旅館だの民宿だのに頼まれて釣ってるですに。百匹で三百円になるから、多い日にゃあ三千円もかせぐですに。昔、父ちゃんはもっと釣ったいなあ」

かよさんは寝たきりの夫に話しかけながら鼻をすすった。

「三千円ていうと、千匹も釣れることがあるんですか」

枕元に坐るかよさんに念を押すと、

「父ちゃんは、三千匹も釣ってたもんですに」

と、安男さんの口角から流れ出るヨダレを割烹着の裾で拭いてやりながら淡々と応じてくれた。

湖の上では土木作業員が着るような紺のジャンパーとオーバーズボンをはいていたかよさんだが、今は色あせたジャージのズボンと手編みらしきセーターの上に灰色の割烹着をかけている。乱れた髪には白髪ばかりが目立ち、浅黒い顔には目尻と額に深い皺が刻まれていた。山間の村ではありふれた初老のおばさん顔ではあったが、色素の薄い丸く澄んだ目が、娘の頃の愛らしさを残しているようにも見えた。

結局、その日は昼近くまでズボンが乾くのを待ってかよさんの家を辞した。この間、彼女は釣れたワカサギを台所で洗ってから、契約している旅館や民宿に配りに出かけ、帰って来ると安男さんの右の上下肢はすべての関節が硬直していて、たしかに回復の余地はなさそうだった。発語も困難な様子だが、意識だけははっきりしていて、いい笑顔をたたえていた。

「おらのワカサギ釣りは道楽じゃねえで、商売ですに。この父ちゃんの代わりにこらの旅館だの民宿だのに頼まれて釣ってるですに。百匹で三百円になるから、多い日にゃあ三千円もかせぐですに。昔、父ちゃんはもっと釣ったいなあ」

かよさんは寝たきりの夫に話しかけながら鼻をすすった。

「三千円ていうと、千匹も釣れることがあるんですか」

枕元に坐るかよさんに念を押すと、

「父ちゃんは、三千匹も釣ってたもんですに」

と、安男さんの口角から流れ出るヨダレを割烹着の裾で拭いてやりながら淡々と応じてくれた。

湖の上では土木作業員が着るような紺のジャンパーとオーバーズボンをはいていたかよさんだが、今は色あせたジャージのズボンと手編みらしきセーターの上に灰色の割烹着をかけている。乱れた髪には白髪ばかりが目立ち、浅黒い顔には目尻と額に深い皺が刻まれていた。山間の村ではありふれた初老のおばさん顔ではあったが、色素の薄い丸く澄んだ目が、娘の頃の愛らしさを残しているようにも見えた。

結局、その日は昼近くまでズボンが乾くのを待ってかよさんの家を辞した。この間、彼女は釣れたワカサギを台所で洗ってから、契約している旅館や民宿に配りに出かけ、帰って来ると安男

河合塾

大学受験科　完成シリーズ
現代文（共通テスト対応）第二講　一

一　次の小説を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点　45）

〔小説の語り手である医師は、夏冬にワカサギ釣りに出かけ、湖に落ちてしまう。そのとき、園田かよさんに助けられて家に連れていってもらい、体を乾かした後に、朝食をごちそうになった。かよさんは、夫の安男さんの介護をしている。〕

園田安男さんは台所のとなりの、もう一つ奥の部屋で寝ていた。脳出血の後遺症で右半身がきかなくなり、三年前から寝たきりになっているのだった。

白髪の坊主頭に茶色のしみの浮く安男さんは絶えず笑っていた。頬の筋肉に締まりがなくなってしまった結果としての表情に過ぎないのかも知れないが、それは見る者を深いところで安心させてくれる無防備な笑顔だった。

安男さんに食事を与え終えて台所にもどってきたかよさんに、

「どなたか病人でもおられるんですか」

と問うてみた。

「ああ、父ちゃんがな、寝たきりだだよ」(注1)

かよさんはあっさりと答えてくれた。

これだけの恩を受けて、どうやって返せばいいのか見当もつかないところだったので、いくらか迷った末に、町の総合病院に勤める内科の医者だが、なにか役に立てれば、と申し出てみた。

「ありがてえけんど、五年前に倒れて、病院じゃあ、はあこれ以上回復しねえからって家に帰されてよれっきりだから、なんともならねえと思うだよ」

そう口にしながらも、かよさんは腰を曲げて奥の部屋に案内してくれたのだった。

安男さんの右の上下肢(注2)はすべての関節が硬直していて、たしかに回復の余地はなさそうだった。発語も困難な様子だが、意識だけははっきりしていて、いい笑顔をたたえていた。

「おらのワカサギ釣りは道楽じゃねえで、商売ですに。この父ちゃんの代わりにこらの旅館だの民宿だのに頼まれて釣ってるですに。百匹で三百円になるから、多い日にゃあ三千円もかせぐですに。昔、父ちゃんはもっと釣ったいなあ」

かよさんは寝たきりの夫に話しかけながら鼻をすすった。

「三千円ていうと、千匹も釣れることがあるんですか」

枕元に坐るかよさんに念を押すと、

「父ちゃんは三千匹も釣ってたもんですに」

と、安男さんの口角から流れ出るヨダレを割烹着の裾で拭いてやりながら淡々と応じてくれた。

湖の上では土木作業員が着るような紺のジャンパーとオーバーズボンをはいていたかよさんだが、今は色あせたジャージのズボンと手編みらしきセーターの上に灰色の割烹着をかけている。乱れた髪には白髪ばかりが目立ち、浅黒い顔には目尻と額に深い皺

さんがあていなくていいという布のオムツを洗濯してストーブのまわりに干した。

かよさんと安男さん夫婦の間に子供はなく、安男さんは営林署に勤めていたが十年も前に定年退職した。もう三年も前から釣り安男さんの唯一の趣味で、かよさんも一緒になって朱工に坐り、釣っ

かよさんはチキサキを家事をこなしながら、水に落ちかけて、パンツもはかずにストーブにあたっていた。

「今度からあ、おらのとなりで釣りをあいいよ、こっちは仕事だから教えてるヤなかねえけど、見て覚えりゃあいいよ。これでワカサギ釣りもけっこう奥が深そもんだよ」

「とりあえずなあ、竿を紙やすりで削って細くするだに。それと、オモリは五円玉をペンチでひねって伸ばすこと。それだけやってりゃあけっこう違うもんだよ」

外に出てから、追いかけてきたかよさんは秘伝の一部を耳元でそっと教えてくれた。

朝四時に家を出て七時半まで釣り、それから車で病院に直行し、釣れたワカサギは医局の冷蔵庫にしまって八時半から医者としての仕事を開始する。ワカサギの釣れる十二月末から二月中旬まで、当直や夜間に呼び出されて仕事をしてやすべこの日課をこなした。

かよさんの釣りは見事だった。塩化ビニールのパイプを細く削った竹の先に[1]センチばかりのゴム管を付け、それで微妙な[2]アタリをとっていた。オモリは五円玉に赤いラッカーを塗ったものをスクリュー状にひねってあり、竿を上下させる仕掛けが水中で回転してワカサギを集めるようになっていた。

氷に開けた穴の三方を囲む風の中で風を防ぐ、アタリを見やすくして竿を軽く上下させると、先端のゴムが微かに動く。鋭あわせる。次のアタリを取り、またあわせる。要するにかよさんは七本ある針にできるだけ多くのワカサギを掛けてからようやく道糸をぐで上げるのである。だから、三匹や四匹掛かっているのはあたりまえで、七本の針に全部ワカサギが付いてくるのも稀ではなかった。

「すごいですねえ」

「まあ、まだまだ」

「慣れたわ、慣れた」

かよさんは自信に満ちあふれていた。

とおおり手をかけてイケ餌のコンロに網を置き、釣れたワカサギを自慢にしてから軽く塩をふってつまんでいたが、それがかよさんの朝食にしかった。

「食べてみとくれ」

うながされて何度か口に入れさせてもらったが、あっさりとした苦みのある上品な香りが口内に満ち、口元をゆるめる以外の表情を浴びてワカサギを集めるようになった。

医者という仕事は年とともに楽になるまくなっていた。考えない つっぱりの意気のようなものだった。

こうして毎年冬になるとかよさんの横に並ばせてもらってワカサギを釣るようになった。

氷に開けた穴の三方を囲む布の中で風を防ぎ、アタリを見やすくして竿を軽く上下させる。先端ゴムが微かに動く。鋭あわせる。次のアタリを取り、またあわせる。要するにかよさんは七本ある針にできるだけ多くのワカサギを掛けてからようやく道糸をぐで上げるのである。だから、三匹や四匹掛かっているのはあたりまえで、七本の針に全部ワカサギが付いてくるのも稀ではなかった。

「すごいですねえ」

はじめのうちはただあっけにとられていた。